

# 北海道大学大学院医学研究科/医学部医学科



# 報

第 44 号

2010 (平成22) 年7月

# CONTENTS =

♦ TOPICS	・日本病理学会学術奨励賞を受賞して 12
・最先端研究開発支援プログラムの採択について … 1	・北海道大学レーン記念賞を受賞して 13
	・「国際保健医学の教育・研究コンソーシアム確立
◆学内行事	のためのワークショップ」を開催して 13
· 教授就任挨拶 4	・Uta Francke教授講演会を開催して 14
・学位論文中間審査を実施して	
・新入生合宿研修が行われました 6	◆お知らせ
「新入生合宿研修の開催」	・管理棟の改修工事が終了しました 15
「新入生合宿に参加して」	・平成22年度 財団等の研究助成採択状況 15
· 第49回医学展総括 ······ 8	·平成22年度 科学研究費補助金採択状況 ······ 16
◆学術・教育・一般	広報室便り14・編集後記
・6/10『九大・北大 合同フロンティア・セミナー 〜最先端研究開発支援プログラムの推進〜』 に参加して	

# TOPICS

# 最先端研究開発支援プログラムの採択について 一持続的発展を見据えた「分子追跡放射線治療装置」の開発研究-

白 土 博 樹 病態情報学講座 放射線医学分野 教授



最先端研究開発支援プログラム(FIRSTプログラム)は、新たな知を創造する基礎研究から出口を見据えた研究開発まで、さまざまな分野及びステージを対象とした、3~5年で世界のトップを目指した先端的研究を推進することにより、産業、安全保障等の分

野における我が国の中長期的な国際的競争力、底力の強化を図るとともに、研究開発成果の国民及び社会への確かな還元を図ることを目的とした、「研究者最優先」の研究支援制度として平成21年度に創設されました。こ

れは、平成21年4月21日に、科学技術政策担当大臣名で出された「研究者を最優先した従来にない全く新しい制度の創設」というレポートに基づき、中心研究者を中心とした研究課題の実施を可能とするもので、実施を支援する機関も中心研究者が指名することが可能です。当初は、「選ばれた30人の研究者は、ひとりあたり平均90億円の研究費を使え、かなりの自由を持った資金運用ができる、そのかわりその研究へ専従する義務があり他の研究には参加できない、厳しい事後評価が待っている…」という内容でした。

医療者としての私は、需要が増し続ける放射線治療装置の今後の展開として、多くの放射線治療医と同じく、小型の癌はコストパフォーマンスの良いX線治療装置で

十分だが、大型の癌にはX線を上回る線量分布を達成できる陽子線治療を普及すべきであると思っております。また、建設費が200億円を超え年間10億円以上の維持費を必要とする炭素線治療装置は、骨肉腫など頻度の少ない癌のための特殊な装置であり、現状では北海道大学医学研究科が手掛けるべきではないと思っております。

研究者としての私は、北海道大学が開発した動体追跡 放射線(2台の透視用X線にて体内の2mmの金マーカー の位置を0.033秒ごとに把握し、2mm以内の位置に腫瘍 がある瞬間だけ、放射線治療ビームを照射する同期照 射)の技術を、スポットスキャン型の粒子線治療(ある 空間座標に対して、粒子線ビームをピンポイントで停止 させる)と組み合わせると、「1リットル以上もある大 きな肺癌や肝癌が呼吸性に動いていても、ぴたりと照準 して治せる世界一の放射線治療装置となり得るのだが …」と思っておりました。また、玉木長良教授のところ のイノベーション研究である半導体PET技術等と組み 合わせれば、低ノイズ分子イメージングで放射線抵抗性 細胞の部分だけに線量を集中するような新たな放射線治 療の展開が期待できるとも思っておりました。これらの 開発研究には100億円以上が必要であるとわかっていた ので、"夢のまた夢"として、実現できることはないで あろう、と思っておりました。ただ、もしものために、 北大工学研究院の電子線加速器にて、フィルムや人体模 型やネズミを用いて、その基礎的な実験はがん特定領域 研究「4次元定位放射線治療の基礎」等にて医工連携研 究で続けておりました。

# 粒子線(電子線、陽子線など)では、磁石でビームの位置を制御できる。







北大工学研究院 45MeV電子線加 速器

径1mmのビームを 0.1mmの精度で制御 して、フィルムに 照射した実験結果。

#### がん特定領域研究「4次元定位放射線治療の基礎」

一方で、平成18年度から始まった産学連携研究であるイノベーション拠点形成事業「未来創薬・医療イノベーション拠点形成」において、日本企業の研究者との共同研究を通じて、同社がアメリカの主要ながん治療病院であるM.D.アンダーソン病院に、当時まだ夢の装置と言われていたスポットスキャン型陽子線治療装置を導入し、その臨床応用を開始したことを知る機会を得ました。拠点内での雑談で、「世界を牽引する可能性がある

治療装置」として上の「動体追跡照射技術+スポットスキャン型陽子線治療技術」のアイデアを述べた際に「ダメもとで、産学連携研究で最先端研究開発支援プログラムに応募してみましょうか?」ということになりました。準備を始めたら、京都大学の平岡真寛教授から電話があり、共同提案者となって「追尾型X線治療装置開発」の部分をご担当頂けることになりました。

平成21年6月19日に公募開始となり、7月24日の締 切日に全国から565件あった応募のうち、70課題弱の候 補に残りヒアリングが行われ、幸いなことに、最終的 に30課題のひとつに残りました。お盆休み返上での申 請書記載(函館への親戚・家族旅行のドライバーをしな がら旅館では徹夜に近い資料作り、車を路肩に寄せては 携帯電話で相談)、内閣府のある霞が関のビルの一室で の緊張したヒアリング(ノーベル賞を取った田中耕一さ んの次の番)など、いろいろ思い出となることもありま した。9月4日に採択が決定し、最終的な30件に残った 際には、我々の提案が北海道大学全体で唯一の採択であ り、放射線関係でも唯一の採択となったということでう れしかったのですが、自民党政権から民主党政権に変 り、政権交代に伴う「候補者の選考過程と金額の見直し」 という話が持ち上がっており、そのまま簡単に話が進み そうではない、という予感もありました。

その後、当初は総額2800億円のプロジェクトであったのが、1000億円に大幅の減額となりました。一人あたり平均90億円だったのが平均33億円になったわけです。さすがに、装置開発研究で、これだけの減額では、予定の大幅な変更あるいは計画全体を断念せざるを得ない危機的状況になりました。まさに天国から地獄でした。しかし、トップ30に選ばれたことを励みに、企業のほうもなんとか実現したいという判断が下り、新しい発想を取り入れて、装置を小型化する案を提示してきました。"必要は発明の母"ということでしょうか?もし、この新しい小型陽子線装置が実現すれば、多くの大学病院や都会の病院でも、今までの1/3程度の金額で陽子線治療装置を導入できることになり、維持費も半額以下となり、かえって予算規模を減額した民主党に感謝しなければならないことになるかもしれません。

小生のほうは、「分子イメージングの利用」に関しては、イノベーション拠点形成事業側で研究を継続することとして総額50億円での申請書の再提出をしました。平成22年3月11日に最終提示額が発表され、我々の研究費は36億円となりました。実に、最初の申請額の20-25%となりましたが、なんとか装置本体だけは作れるぎりぎりの金額でした。

平成22年度には追加措置として、総額100億円を30 課題に傾斜配分するそうです。我々の研究にも加速・強 化予算がさらに認められるものと期待しており、それが 認められると、なんとか世界一の性能を小型加速器で実 現する装置を実現できそうです。ただ、こちらは単年度 予算であり、上手に使いこなすことができるかどうか、 知恵を絞っております。

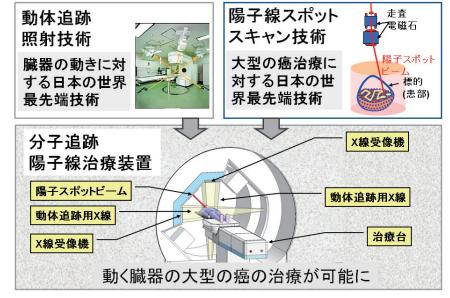
北海道大学役員会では本研究が採択されたことを高く評価していただき、施設の建設に関して極めて大きな支援をしていただけることになり、また人的な支援に関しても、十分対応して頂けることになりました。このような評価をしていただいたのは、医学研究科長や大学病院長をはじめとする多くの関係者の方のバックアップがあったからであり、感謝に堪えません。

減額に伴い中心研究者への専従義務は外されました が、減額分の研究は、他の研究費を獲得する必要に迫 られ、結果として、中心研究者はいままでと同じよう な「研究費獲得とその報告義務」という日々を送ってお ります。よって、「研究者を最優先した従来にない全く 新しい制度の創設」という最初の大胆な目標からは、残 念ながら、ずいぶんと後退したように思います。しか し、そうは言っても、トップ30に選ばれたことは誇り に思うわけでありまして、なんとか、研究期間内に優れ た装置を作るべく、若い放射線治療医師といっしょに なって、工学研究科・大学病院と連携して、毎日のよう に戦略会議を開き、装置開発に必要な諸条件をクリアし つつあります。特に、連携センター医学物理学部門の石 川正純教授が獅子奮迅の活躍をされ、また、工学研究科 応用量子ビーム工学講座には、中性子遮蔽の綿密な計 算・アドバイスをして頂き、効率的な設備設計に大きく 貢献して頂いております。プロジェクトの予算が下りて からは、新たなスタッフとして、最先端研究開発支援室 プロジェクトマネージャー・梅垣菊雄特任教授(工学博 士)、放射線生物医工学分野·木下留美子助教(医学博 士)、分子追跡医学分野・松浦妙子特任助教(理学博士)等、全国から優秀な研究者を迎え、またサブプロジェクトマネージャーには北海道経済産業局から直江健二研究企画官を迎え、新たな事務職員も支援室に増えつつあり、徐々に最先端研究にふさわしい陣容になってきました。細かな内容に関しては知財が係るのでまだオープンにできませんが、研究者の顔ぶれをみると、たぶん、良い研究開発ができるのではないかと思います。

さて、「今まで治らなかったすべてのがん患者を救うこと」が、小生の願いです。臆面もなく…とお思いでしょうが、言霊の魔力にはいつも驚かされてきました。「ダメ元でもやってみるか…」というのを、フロンテイア精神というのであれば、今回は北海道大学で培われたフロンテイア精神が役に立ったのだと思います。大言壮語と言われるのを怖がらず、小声でもよいので、とりあえず、言葉にして口に出してみること…若い開発研究者には、ぜひ、この言霊を利用して、アンガジュマン(古い…)されることをお勧めします。

今日もまた、がんに慄く患者やその家族が、一縷の望みを託して我々の外来に来られ、あるいは入院ベッドの上でまんじりともせず夜を迎えておられます。この研究は、北海道大学医学研究科や大学病院が今まで築いてきた多くの研究教育診療実績の上に成り立っていることは、論を待ちません。今後とも、あまり目立たなくても、一日一日、患者中心の医療を行うことが、最先端研究開発には必須であると思っております。皆さまといっしょに、地に足のついた基礎研究と橋渡し研究と臨床研究を、長期的に慎重に行い、患者の視点から見て、すばらしい癌治療研究と癌医療を実現できることを、切に願っております。

# 研究開発の成果:達成される具体的内容 分子追跡陽子線治療装置の開発



最先端研究開発支援PGにより開発する分子追跡陽子線治療装置:

動体追跡照射技術と陽子線治療スポットスキャン技術を融合させて動く臓器の大型の癌の治療を北海道大学病院において可能にする。

# 2 学内行事

# ■教授就任挨拶

# 就任挨拶

伊東 学 寄付講座 脊椎脊髄先端医学講座 特任教授



本年4月1日から寄付講座 育椎脊髄先端医学講座の特任 教授に就任した北大63期の 伊東 学です。本講座は平成 21年4月に整形外科主任教授 の三浪明男先生が開設され、 教授を併任されておられまし たが、三浪教授からのご推薦 と医学研究科教授会のご承認

をいただき、この4月から特任教授を拝命いたしました。 私は、今まで15年間、北大病院整形外科で脊椎脊髄疾 患の治療に携わってまいりましたが、その間、医学研究 科をはじめ北海道大学病院の諸先生をはじめコメディカ ルの方々に大変お世話になりました。この場を借りて心 から御礼を申し上げます。

私は、脊柱前方再建手術の世界的権威としてご高名な 同名誉教授の金田清志教授に師事し、研修医時代には 美唄労災病院(現北海道中央労災病院腰痛せき損セン ター) で松野誠夫名誉教授のご指導のもと脊椎脊髄疾患 の治療に従事しました。脊椎脊髄疾患の外科的治療が、 症例のQOLを劇的に改善する現場を幾度も目の当たり にし、脊椎脊髄の治療に携わる決心をいたしました。そ して三浪現教授のもとでは、鐙邦芳教授(体幹支持再建 医学分野)のご指導をいただきながら、高齢者の骨粗鬆 症性脊椎骨折をはじめ、脊椎内視鏡を使用した最小侵襲 脊椎手術や高度な脊柱変形の治療に従事してまいりまし た。中でも脊椎感染症に対する最小侵襲内視鏡下掻爬洗 浄術は、難治性脊椎感染症の治療に難渋している国内外 の施設からの問い合わせが多く、現在本病院から先進医 療への申請中です。重篤な全身疾患を有するコンプロマ イズドホストの増加に伴い、脊椎感染症例が増加してい る現在では、このような症例への手術の低侵襲化は急務 であります。また、より安全に美しく脊柱変形を矯正する新しい手術技術を開発し、思春期特発性側弯症の子供たちがハンディキャップなく社会生活を送ることができるように支援しております。これらの先端手術治療を見学に、多くの外国人医師たちが当講座を訪れております。本年度は、インドや香港などのアジア諸国から、既に5名の医師が勉強に訪れてくれました。

私が4年間の任期内で行う仕事として、脊椎脊髄医療 に役立つ先進的な医療技術や器機の開発と、それに必 要な基礎研究を産学官連携で進めてまいりたいと思いま す。現在、新規脊柱再建インプラントの開発を、企業や 北大工学部と共同して行っております。高齢者の脊柱再 建術では、骨粗鬆症による骨の脆弱性のため、良好な移 植骨採取が困難なことから、より生体親和性の高い新規 骨補填材料を開発する必要があります。そのために、企 業、道立総合研究機構、北海道医療大学、北大歯学部と 共同研究グループを編成しております。臨床研究では、 骨粗鬆症に関連する薬剤の治療効果に関する共同研究 を、道内で臨床の第一線でご活躍の先生方と進めており ます。また、全国の主要な脊柱側弯症治療施設との共同 研究として、特発性側弯症の発症に関与する遺伝子の探 索研究を開始しております。今後、このような学閥や組 織を越えた研究を進めることが、当講座の重要な仕事と 考えております。また、国内の脊椎脊髄病専門医を目指 す若手医師の教育はもちろんのこと、発展の目覚ましい アジア諸国の若手医師たちの教育にも力をいれていきた いと思っております。

私は、臨床医としても研究者としてもまだまだ未熟ではございますが、母校である北海道大学医学研究科ならびに北海道大学病院の発展のために、微力なりともお手伝いできれば幸いです。皆様からの温かいご支援、ご指導をどうぞよろしくお願い申し上げます。

# ご 挨 拶

#### 石 川 正 純 先端医学講座 分子追跡医学分野 教授



2010年5月1日付けで先端 医学講座分子追跡医学分野 (連携研究センター医学物理 部門) 教授を拝命いたしま したので、ご挨拶申し上げ ます。

放射線治療の分野では、 科学技術の発展に伴う治療 装置の進歩がめざましく、

特に、粒子線治療では特殊な物理学の知識が必要不可欠です。このたび、北海道大学では最先端研究支援プログラムの一環として、北海道大学が世界に先駆けて開発および臨床応用を実現した動体追跡放射線治療技術に、陽子線スポットスキャニング照射法を組み合わせた新しい陽子線治療装置を開発することとなり、工学及び医学物理学を背景とする私のような人材を取り入れていただきました。

放射線治療分野では、この陽子線治療装置の他にも、

動体追跡放射線治療技術をさらに発展させるための次世代型動体追跡放射線治療技術の開発や、科学技術振興機構「イノベーション創出拠点の形成」のプロジェクトにて進行中の分子イメージングと放射線治療装置の融合を目的とした新しい分子イメージング装置の開発など、医学物理学・工学の活躍が期待されています。このような活躍の場を与えていただいたことに感謝するとともに、その期待に応えられるよう、誠心誠意、自分の持っている力を発揮するのみならず、新たな知識を習得し、さらには新たな知見を開拓していきたいと考えております。

また、大学に所属しているという責務として、次世代を担う若手人材の育成についても積極的に貢献したいと考えております。私自身がまだまだ若輩者であるため、自身への啓蒙活動の意味も含めて、ともに学んでいける環境作りに努めたいと思います。

至らないところも多々あるかとは存じますが、皆様の 温かいご支援とご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申 し上げます。

### 学位論文中間審査を実施して

## 三輪 聡 一 大学院教務委員長

医学研究科博士課程は平成19年度より従来の6専攻 (生体機能学、病態制御学、高次診断治療学、癌医学、 脳科学、社会医学)から1専攻(医学専攻)3コース制(臨 床医学、基盤医学、社会医学) へ改組され、同時にカリ キュラムにも大きな変更がありました。また、4年間の 博士課程在学期間での学位取得を促進するために、「中 間審査制度」が導入されました。中間審査は、複数の審 査員により、研究遂行能力や専門分野での理解度を確認 するとともに、論文作成に向けての助言・示唆を行い、 スムーズに「最終審査」へと導く教育プロセスとして機 能することを目的としています。この審査は、博士課程 3年次のはじめに公開発表会形式で行われ、審査員は大 学院生の研究指導資格を有する教員(教授と一部の准教 授)3名以上により構成されます(ただし、指導教員は 審査員にはなれません)。審査員の選出方法が、非常に 特徴的なものとなっています。すなわち、従来の博士論 文の審査員は、指導教授が指名していましたが、中間審 査では学生と教員にあらかじめ研究に関するキーワード を提出してもらい、コンピューターを用いてマッチング 係数を計算し、係数の高い教員3人を機械的に選出する

方式となりました。キーワードは、あらかじめ設定され た一覧表から選択することになっています。実際には、 平成21年度に第一回が実施され、92名中4名が不合格 となりました。中間審査は進捗状況に対しての審査・助 言であることから、当初「否」という結果は想定してい ませんでした。しかしながら、このように「否」判定が 実際に出たことを踏まえ、合否の判定基準の点数化・客 観化を行うと同時に、再審査は翌年の正規の中間審査を 受けてもらうこととし、さらに、再審査も不合格となれ ば1年留年することになるという規定も作成しました。 平成22年度の第二回中間審査では、大学院生のプレゼ ンテーションおよび質疑応答が飛躍的に改善されてお り、不合格者は83名中2名のみとなりました。現在の最 大の問題点は、マッチング方式により選出された審査員 のミスマッチが多いということであり、平成22年度は この方式で選出された審査員のべ249名中、54件の明ら かなミスマッチが起こっていました。今後、キーワード の変更やグループ分けなどについて更なる検討を行わな ければならないと考えています。

# 新入生合宿研修が行われました

平成22年4月10日(土)から11日(日)の一泊二日の日程で、伊達市「大滝セミナーハウス」にて、平成22年度 医学部医学科新入生の合宿研修が実施されました。

#### 【研修日程】

#### 4月10日(土)

- 教職員紹介
- 研修 I
- ①「医学部長挨拶·講話」

安田 和則 医学部長 (運動機能再建医学分野)

②「医学部6年間のカリキュラムについて」

有賀 正 教授(小児科学分野)

③「全学教育の履修について」

吉岡 充弘 教授(神経薬理学分野)

- 研修 Ⅱ
- ①「医学研究実習ガイダンス」

岩永 敏彦 教授(組織細胞学分野)

②「アルコールの正しい飲み方」〈パッチテスト〉

II

上級生による課外活動概要説明

#### 4月11日(日)

- 研修Ⅲ
  - ①「共用試験及び臨床実習について」

小華和柾志 准教授 (医学教育支援室)

②「コンピュータ利用における著作権侵害および情報 漏洩の防止について」

佐藤 松治 助手(広報室)

③「安全衛生及び学生生活について」

佐邊 壽孝 教授(21組クラス担任)



講話される安田医学部長

#### 「新入生合宿研修の開催」

佐 邊 壽 孝 分子生物学分野 教授(21組クラス担任)

去る4月10-11日にかけ、新入生を対象とした研修が行われた。これは単に学生生活開始にあたっての注意事項を与える研修ではなく、大学施設である大滝セミナーハウスまでバスに分乗して出かけ、一泊の合宿形態をとる事により新入生同士がより親密になる事も意図したものである。

到着後、まず安田医学部長から、医学生になった事の誇りや悠々たる未来が開けている事、しかし、それを現実のものとするにはこれからの学問精進が必須であることのお話があった。「諸君はこれだけの難関を突破したのだから、自分というものにまずもって強い自信を持てば良い」、とのお言葉が印象的だった。各教員からの講演の後は、運動クラブの先輩達も合流し、勧誘や学生生活全般について先輩からの『(有難い、そして、

ありがた迷惑な)御教示』や、新入生同士の交流 会が深夜まであった。朝方迄続く学生達の議論や 笑い声にはいつの時代にも変わらない青春が高く 香り、うらやましくもあり喜ばしい思いであっ

翌日は雪の残る大滝セミナーハウスを出て、洞 爺湖まで足を伸ばし、ウインザーホテルを望む美 しい湖畔で昼食をとった。手のかかった料理でお いしかった。その後、中山峠の雄大な景色を見な がら帰札した。この間も学生達の健康的なさざめ きは途絶える事はなかった。時を経て、北大での 学生生活のかけがえのない思い出となることと思 う。なお、研修の詳細は日程の項を参照して下さ い。

#### 「新入生合宿に参加して」

#### 柴 田 美 音 医学部医学科1年



私たち第92期は、 伊達市の大滝セミナー ハウスでの新入生合 宿に参加しました。4 月10日の午前10時に 大滝に向けて北大を出 発しました。100名を 超える参加者でしたが バスの中での自己紹介

や近くに座った人と話をしたりしている次第にうちとけていきました。昼食場所の北海道まるごと市場につく頃は緊張が少しずつほぐれていきました。14時ごろに大滝セミナーハウスに着き、研修が始まりました。

部屋に荷物を置いてすぐに研修室にいきました。いよいよ研修の始まりです。医師になる勉強 が始まるという嬉しさが胸にこみ上げてきました。 と、同時にほぐれていた緊張がたかまりました。

はじめは医学部部長の安田和則先生が講話をしてくださいました。研究のことや医師になる心構えについてのご説明はとても興味深く、改めて医師になるということの責任を感じました。

続いて、有賀正先生が医学部6年間のカリキュラムについてお話をしてくださいました。6年間、一つひとつ、すべての講義に神経を集中して医師に必要な知識を身につけようと決心しました。

さらに、吉岡充弘先生が全学教育の履修について説明してくださいました。医師としての学習はもちろん大切ですが、社会人として必要な教養を身につけていくことを教えてくださいました。患者さんと向かい合っていくためには専門知識だけ

ではなくごく普通の社会人としての教養も要求されることを感じました。

夕食後は岩永俊彦先生が研究実習ガイダンスと アルコールの正しい飲み方について説明してくだ さいました。アルコールの正しい飲み方ではパッ チテストも行い、お互いにアルコールに対する体 質を見比べたりもしました。研究実習では1年生 も研究室に配属されて実際に論文抄読会に参加 し、実験をさせてもらえるときいていたので、と ても楽しみにしていました。

また、1日目の最後は大滝セミナーハウスまできてくださった上級生の方が部活動紹介をされました。先輩から部活の事だけではなく、大学生活のことなども教えてもらい今後の自分の大学生活をどう組み立てていくのかをさらに具体的に知ることができました。

上級生の方が帰った後も、新入生のほとんどが食 堂に集まり、夜遅くまで語り合い、次の日となりました。

翌11日は、小和田柾志先生が共用試験及び臨床実習について、佐藤松治先生がコンピュータ利用における著作権侵害および情報漏洩の防止について、佐邊壽孝先生が安全衛生及び学生生活について、説明してくださいました。この合宿において最後の研修となりましたが、急変していく情報社会に適応していく力が求められているということを実感しました。

この合宿で具体的にこれからの大学生活どう過ごしていくのか、どんな講義を受けるのかというお話しを聞いて、大学生活に対する期待がさらに ふくらんでいきました。

最後になりましたが、私たちが順調に大学生活 に入れるように合宿をしてくださった先生方にこ の場を借りて、心よりお礼申し上げます。



熱心に聞き入る新入生



全学教育について説明する吉岡教授

### 第49回医学展総括

### 佐藤洋祐第49回医学展実行委員長

本年度も北大祭実行期間中の6月5日(土)、6月6日(日)の二日間にわたり、第49回医学展を開催いたしました。開催初日の朝こそ曇天ではありましたが、その後は天候にも恵まれ、二日間合わせて3000人を超える来場者がありました。準備段階では様々な課題が浮き彫りになり、中には来年度以降への宿題となったものもございましたが、ご来場頂いた市民の方々にはご好評の声をいただき、またスタッフとして参加した学生からもやりがいを感じたと報告を受け、市民と学生のコミュニケーションの場を提供するという医学展としての役割を全うできたのではないかと感じております。各企画の詳細は後述することとして、まずは医学展実行委員会の運営についてご報告させていただきます。

本年度の医学展を開催するにあたり、最初に課題と なったのは会場の確保でした。例年使用させていただい ていた旧管理棟は、改築が完了する時期が前後する可 能性があったために、開催場所としては不安が残る選択 肢となりました。そこで既に改築が完了しておりました 新医学部図書館での開催として計画を詰めて行くことに なりましたが、会場の広さや間取りが例年とは大きく異 なるために、直前まで試行錯誤しながら設営を行いまし た。また医学部ロータリーで実施してきました献血や盲 導犬体験会、車いす・妊婦・高齢者体験会などの屋外企 画、運動系団体が実施する模擬店などの実施場所につき ましても、医学部図書館との間に距離があることを来場 者に感じさせないような配置にするための議論を何度も 重ねました。当日は会場の配置に関する問題点がいくつ か発見されましたが、多くの来場者にスムーズに医学展 へ足を運んでいただけたものと考えております。

また例年持ち上がる根の深い問題として人員の確保が あります。医学展実行委員会は恒常的に運営されている 組織ではなく、その年度の医学展が終了すると事実上解 散となります。反省点やアイディアの引き継ぎは各部門 の幹部個人に一任され、医学展開催に関する知恵は蓄積 されにくい状況にあります。また、一般スタッフとして の参加者を募るのにも例年難渋しております。実施でき る企画数は幹部の人数に左右され、参加者が集まらない ために初期計画段階から実施企画が削減される事は珍し くありません。実際、昨年度は少ない人数でも医学展が 実施できるように企画数が一部削減され、今年度も検査 体験会部門でのスリム化がありました。しかし例年より 1、2年生の参加者が多かったこと、参加者が複数部門 を掛け持ちしてくれたことなどにより、盲導犬の歩行体 験会や実験教室などの企画が復活でき、それらは大変な 賑わいを見せました。さらに昨年度からIFMSA(国際 医学生連盟)の協力により実施しております「ぬいぐる

み病院」、「SCORA展示」の2つの企画につきましても、 大変な好評を博したと聞いております。



SCORAの発表に聞き入る市民たち

このように、医学展が抱える課題は様々ではありますが、その多くはスタッフの知恵により解決可能であると考えております。また医学展の持つ意義については、いかに回数を重ねようと決して薄れるものではありません。医学展は医学生と一般市民の方々が直接交流を持てる数少ない場であり、医学部の教育や医学生の様子、日頃の成果を外部に向けて発信する機会です。さらに普段関わることのない先輩や後輩、同級生と新たな関係を築く契機となっています。実行委員長として拙い点は数多くあったと思いますが、本年度の医学展に参加、ご協力頂いた皆様が、少しでも有意義であったと感じて頂けていれば幸いです。

最後になりましたが、第49回医学展の実施には、関係各位の皆様のご協力・ご支援が不可欠でした。改めて、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

#### <企画部門 講演会>

本年度は大学外から講演者をお一人お招きし、講演をしていただきました。有限会社「オフィス・セレンディピティー」の鱸伸子代表取締役に、「賢い患者の会話術」と題しまして、診察室での患者と医師のコミュニケーションを患者の視点から切り取り、患者が医師と良好な関係を築く上でのコツを、ご自身の経験を踏まえてお話し頂きました。聴講者参加型のユニークな講演で、なかには熱心にメモを取られている方や、講演が終わった後、講演者に長い時間にわたり質問をされる方もおられました。今年も非常に魅力的な内容をお話しいただき、聴講者から大変なご好評をいただきました。一方、広報活動には例年どおり苦労しました。毎年行っておりますポスターやチラシの配布に加えまして、メインストリー

トへの看板設置など、今年度から新たに行った取り組み もありましたが、効果は薄いようでした。来年度以降の 講演会実施の可否も含め、議論の必要があるでしょう。

#### <企画部門 障害者体験>

医学部管理等前のロータリーにおいて、車いすや妊婦、高齢者の体験キットを用いた体験会を実施しました。妊婦や高齢者はいずれも身近な存在であるにも関わらず、そういった人々の視点を得ることは必ずしも容易ではありません。また車いすを利用せざるを得ない状況の方がどういった時に苦労し、どうしたら手を貸せるのか認識することは、形だけのバリアフリーから脱却する上で必須となります。車いす体験会は小学生くらいの年齢の来場者に、また妊婦体験会はカップルに人気であったと感じております。医学部生としても、一般の方々が体験会を通じてどのような感想を持つか抱くのかは、インフォームドコンセントなどを得る上で役立つ知識になると考えます。

#### <企画部門 献血>

医学展における献血の呼びかけは今年で7回目を迎えましたが、例年どおり受付や献血バスを管理棟前ロータリーに配備し、メインストリートを歩く人々に献血への協力を呼びかけるという形で行われました。献血バスの台数は2台から1台へと減りましたが、天候やスタッフの熱心な呼びかけもあってか、100名弱の方に献血して頂く事ができました。大学祭という場で献血への協力を呼びかけるということには抵抗感を取り除く事が難しいなどの課題もありますが、血液を集めるという他に、献血への関心を呼び起こすという副次的な効果もあり、今後も続けて行きたいと考えております。

#### <企画部門 映画上映会>

今年度から新たに実施した企画です。医療や死生観に関する映画を2本、1日あたり1本ずつ上映しました。著作権法を参照し、医学展内の企画として実施する上では法的な問題のないことを確認しました。上映を終えたあと、来場者がスタッフに感想を述べてくださるなど、実施した甲斐のある企画となりました。一方、日中の実施では来場者が最初から最後まで鑑賞する事は難しいという点もあきらかになりましたので、来年度以降も実施する場合にはどのような形をとるか議論してく必要があるでしょう。

#### <企画部門 盲導犬体験会>

北海道盲導犬境界からPR犬と訓練士さんをお招きし、 盲導犬の一生や仕事について理解を深めていただくとと もに、アイマスクを装着した状態で来場者の方に体験歩 行をしていただきました。天候にも恵まれ、またPR犬 の愛らしさや無邪気な表情に惹かれ、多くの方々に参加 いただきました。スタッフも盲導犬との出会いを通して 多くを学ぶことができたようです。



盲導犬体験会にて

#### <企画部門 科学体験教室>

来場者自らが参加する実験を通して、医学に触れていただくことを目的としています。ミラクルフルーツとギムネマ茶という味覚を擾乱する食物を摂取したあと、酸味や甘味を感じるはずの食品を摂取しても期待される味がしないことに驚きの声が数多く聞こえてきました。またミラクルフルーツは例年よりも安く仕入れる事が可能になり、もう一つの脳波を用いた企画を実施する事ができました。

#### <救急部門>

救急部門ではAEDを用いた心肺蘇生講習会とドクターへリ見学会の2つの企画を実施しました。心肺蘇生のマニュアルが変更になるなど、展示内容についていくつか動きはありましたが、担当幹部が自費でBLS資格の取得を行うなど積極的な関与をしました。結果として、分かりやすい展示が行えたのではないかと思います。

市民の方々はドラマや映画を通じて心肺蘇生のイメージはあるものの、実際に練習用の人形を前にすると何から行えばよいか困惑している様子でした。またAEDについても、設置台数が増えて多くの市民の目に触れるようになったものの、やはり使い方については知られていない面も多く、このような講習会を含め、知識を普及する必要性があると感じています。

また北大祭医学展の名物となっているドクターへリ見学会には例年を超える方が訪れ、着陸では歓声があがったほか、その後運行スタッフの方々から説明を受けると、質問が次々と飛び出すなど活発な会であったと思います。

ドクターへリの認知度はドラマや映画の影響から大きな高まりを見せています。面積の広い北海道において

は、ドクターへリは言うまでもなく極めて重要な緊急搬送手段です。今後もこの企画を続けて行くことで、ドクターへリへの理解を深めるきっかけを提供したいと考えております。

救急部門の企画実施に際しまして、北大病院救急部の皆様、卒後臨床研修センターの皆様、手稲渓仁会病院ドクターへリ運行スタッフの皆様など、多くの方々のご協力を賜りました。お忙しい中、ありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。



心肺蘇生講習

#### <検査体験会部門>

医療現場で行われている様々な検査を医学生が実施し、市民の皆様にそれを体験して頂くという、医学展の中心的な企画です。毎年これを目当てに医学展に来場される方もいらっしゃるように、北大医学展の目玉の一つとなっています。

今年度は人員の関係上、アルコールパッチテスト、エコー、心電図、呼吸器の4部門を実施しました。問診部門や代謝部門の削減には来場いただいた方から復活を望む声を多く頂きましたが、それでも多くの来場者が検査を体験され、自分のデータに興味津々といった面持ちでした。

検査体験会は学生にとっても、実習の短い時間以外ではなかなか扱うことのできない検査機器の原理、使い方を勉強し、実際に検査することが出来るようになる貴重な機会となっています。特にBST前の4年生は主体的かつ積極的に勉強会を行っており、指導して頂いたドクターの話に真剣に耳を傾け、知識を吸収しようとしていました。

また検査体験会のもう1つの意義として、検査を通し た医学生と市民との交流があります。医学に関する話 から他愛の無い雑談まで、待ち時間などを用いて市民の 方々と話をすることができました。「ありがとう」や「頑 張ってください」などの温かい言葉をかけていただくこ とも多く、学業へのモチベーションを高めた学生もいた ようで、医学展全体の意義ともつながる検査体験会の在 り方は、今後も守って行きたいと考えています。

本年度も検査体験会の開催に伴いまして検査機器の貸し出しにご協力頂いた北大病院各医局の皆様や株式会社パナソニック様、当日の待機ドクターを勤めていただいた先生方、その他多くの皆様のご協力を賜りました。皆様のご協力がなければ検査体験会は開催できませんでした。この場で改めて御礼申し上げます。

#### <IFMSA (国際医学生連盟)による企画>

昨年度に引き続き、IFMSA(国際医学生連盟)が主催する企画が2つ設置されました。1つ目の企画は「ぬいぐるみ病院」というもので、主に小さな子供向けに、ぬいぐるみを使った診療「ごっこ」などを通じて医療への恐怖感を除去したり、ヘルスプロモーションの実施などを意図して、全国の様々な場所で行われています。今回もぬいぐるみ病院に加え、紙粘土を使い、実際の重量にあわせてつくった臓器の模型等も用意され、幅広い年齢の来場者が実際に触って体験できる企画を楽しんでいる様子でした。

2つ目の企画は「SCORA」というもので、昨年に引き 続き性教育を中心とした展示を行いました。STDは札 幌市が抱える公衆衛生上の問題でも大きなもので、大学 祭という場においてもその啓発活動は大変意義のある事 だと感じています。いずれの企画も、展示を通して市民 と学生とのあいだにコミュニケーションが形成されてお り、医学展の目的という観点からも良い企画であったと 言えると思います。



打ち上げでの集合写真(著者:2列目左から5人目)

# 3

# 6/10『九大・北大 合同フロンティア・セミナー 〜最先端研究開発支援プログラムの推進〜』に参加して

# 白 土 博 樹 放射線医学分野 教授

平成22年6月10日(木)18:30-20:45に、第6回 九大・北大合同フロンテイア・セミナーが東京ステーションコンファレンスにて行われた。同セミナーは、北海道大学と九州大学が、それぞれの大学が現在進めている研究を、広く産業界、社会人、同窓生の皆様に知っていただき、各分野の方々との連携・交流を深めるため、標記セミナーを合同で開催しているものであり、北大本部の研究戦略室と東京の北大同門会が、その開催に活躍されていると聞く。平成21年6月の第3回には久下裕司(北海道大学アイソトープ総合センター教授)が未来創薬・医療イノベーション拠点形成に関連して「分子イメージング」に関する話をされて、玉木長良(北海道大学アイソトープ総合センター長教授)がコーディネーターとしてパネルデイスカッションをされている。

今回は、北大も九大も最先端研究開発支援プログラムにひとつずつ選ばれたこともあり、安達千波矢先生(九州大学 最先端有機光エレクトロニクス研究センター長大学院工学研究院 教授)と小生がそれぞれの最先端研究開発支援プログラムについて30分程度の紹介をして、そのあと安達淳治様(九州大学最先端有機光エレクトロニクス研究センター 学術研究員)がコーディネーターをされた。ちなみに、安達淳治様は、本プログラムのために昨年8月に大企業を辞めた方で、政権交代に伴う再審査により半年近くの不安な浪人生活を余儀なくされたとのことであった。

安達千波矢先生のお話は、【未来を拓く有機光エレクトロニクス -新しいプラスチックエレクトロニクスの幕開け】という演題であった。有機材料は、新しい半導体材料として優れた性質を有していることが明らか

となりつつある。新しい発光機構を用いた有機EL素子、分子配向を積極的に利用した単結晶デバイス、液状半導体による新しいフレキシブルデバイス等の有機材料の特徴を生かした研究展開について紹介された。有機EL、有機トランジスタ、有機太陽電池等の高性能化のための材料・デバイス設計から新しい光デバイスの展開を目指した最近の研究成果について紹介され、有機エレクトロニクスが拓く未来について非常に興味深いお話をされた。

小生は、【最先端の大型治療機器開発と今後の展望】という演題で、今後の放射線治療装置の柱となるスポットスキャン型小型陽子線治療装置と体内で動いているがん組織を狙い撃ちする動体追跡装置を組み合わせることで、いままで不可能であった「大型で動きのある肺癌や肝癌」の治療までを可能にする世界初の医療機器の開発研究を行うことをご紹介した。最先端研究開発支援プログラムの特長である「年度をまたぐことのできる予算」は有難いが、一度は減額によりあきらめかけたことなどを述べた。また、産学連携研究、大型機器調達、大型医療機器の薬事法申請などの苦労と今後の展望について述べた。

首都圏で活躍している両大学のOB・OG等や一般の方を含め、約100名の方が参加した。セミナーは有料(1000円)での開催で、軽食と飲み物(アルコール等)が提供された。パネルデイスカッションでは、出席者からの質問も活発に行われ、盛会裏に終了した。たぶん定年後も知的刺激を求めて集まってこられていた両大学のOBからの、現役の大学人を凌ぐ深い洞察やふたりの研究者の価値を見極めようとする挑むような質問に、答える側も



セミナー講演中の白土博樹教授



軽くアルコールが入って熱い議論が…

峻厳たる気持ちで背筋を伸ばさざるを得ないパネルデイスカッションとなった。ふと、幕末の危機を救ったのが九州で、明治の自由な学問の発祥が北海道だったこと、これらの革命の源がこの国の地理的な中心地ではなかったことを思い起こさせるような、我が国の遠い将来を見据えた真剣な議論が続いた。両大学のOB・OGらの大きな期待を担っていることを実感するとともに、九大・北大合同フロンティア・セミナーは、意外と将来の日本の科学を本質的なレベルで救う核になる可能性があると思った。

あるいは、われわれは、いつもそのような行動を起こすべき立場にいるのかもしれない。地理的な中心地からある程度離れているほうが、長い時間軸を意識しながら大胆な改革を進めることができるというのは、歴史的な事実である。日本の高い科学的思索レベルと芸術的ともいえる技術力を生かす最先端研究開発というゴールのためには、北海道内だけでの自立や、逆に欧米や勃興する新興国との複雑な攻防に目を奪われずに、九州との関係を強化するようなキラーパスが必要なのかもしれない。

# 日本病理学会学術奨励賞を受賞して

# 西原 広史 探索病理学講座 特任准教授

このたび第99回日本病理学会学術総会におきまして、研究課題「シグナル伝達分子の分子病理学的解析; Crkファミリー蛋白と腫瘍」にて、平成21年度学術奨励賞を拝受致しました。本奨励賞は、病理学の基礎的研究あるいは診断業務の中で特に優れた学術的貢献を行った40歳以下の若手病理研究者に対して与えられるもので、病理研究者として大変な名誉であり、嬉しさと同時に受賞者の名に恥じない研究をさらに展開しなければ、と身の引き締まるような思いを感じています。

Crk及びそのファミリー蛋白に関するシグナル伝達研 究は、私が大学院2年目の1995年に国立予防衛生研究 所 (現感染症研究所) にて松田道行先生 (現京都大学医 学部病理学講座教授)の御指導の下、血球細胞特異的 に発現するDOCK2という分子のクローニングから開始 致しました。その後北海道大学に戻り、Crk及びDOCK ファミリー蛋白の癌化に関わる機序を分子病理学的に解 明する一方で、自分が学んできたシグナル伝達に関する 知識・研究技術を少しでも医療の現場、すなわち患者さ んに直接還元したい、という思いが募り、いわゆる橋渡 し研究の重要性を強く認識するようになりました。2008 年には、この橋渡し病理学の創立を目指して探索病理学 講座(寄附講座)を開講し、Crk/DOCKファミリー蛋白 の機能解析を一つの柱としながら、次世代のテーラー メード治療に対応するための個別化病理診断の基盤作 成を目指して日々臨床病理研究に没頭しております。ま た、このような橋渡し研究を開始したことで臨床及び診 断病理の重要性を再認識し、臨床・病理・基礎研究に対する広い視野を持つ臨床研究医を指導・育成する必要性を強く感じるに至り、最近は教育活動にも積極的に力を注いでおります。

最後になりますがこの場をお借りしまして、病理学の 基礎を御教授頂き、研究の道へ導いて下さいました長嶋 和郎名誉教授(現札幌東徳洲会病院病理部長)、並びに 現在研究の御指導を頂いております田中伸哉教授(腫瘍 病理学分野)に、心より御礼を申し上げます。



平成22年4月 第99回日本病理学会総会にて(著者:右端)研究を指導した、石川麻倫さん(左:医学部6年生)と大場彩音さん(中央:医学部5年生)の学部学生ポスター会場にて撮影。両名は、学部学生発表優秀賞を受賞。

# 平成22年度北海道大学レーン記念賞を受賞して

# 堀 口 美 香 医学科3年

今年度、歴史あるレーン記念賞を受賞致しまして、大変光栄に思います。幸いにも、この場をお借りしてレーン記念賞受賞を御報告する機会を頂きましたので、先ず私と英語の接点がどこから始まったのかからしたためたいと思います。

私と英語の関わりというのは、中学校でアルファベットから英語を学んだことを機に始まっております。それ以前には、英語に触れる機会はほとんどありませんでした。中学2年生頃から洋楽に興味を持ち始めたことが切っ掛けとなり、洋楽好きが高じまして、そのまま現在に至っておりますが、ただ趣味の1つとして洋楽を聞いている程度で、これといって特別なことは何もしておりません。昨年度、財団法人北海道大学クラーク記念財団による奨学金助成により、ミュンヘン大学で8月から1ヵ月程、ドイツ語の語学留学をさせて頂きましたが、現在まで英語圏への渡航はまだ一度もありません。以上のような経過を辿ってきたため、レーン記念賞受賞決定の一報を頂いた際には、実の所、大変驚きました。しかしながら、このようにレーン記念賞という形で、今まで積み重ねてきた努力を評価して頂いたことを心からうれしく思います。

今、私は学部に移行して2学期目ですが、英語が必修科目である教養の頃と比較すると、自ら求めていかない限り、専門用語は別として、英語に触れる機会は少なくなりがちです。しかしながら、これから長期的に見れば、英語を要する場面が増加するのは必至であり、やはり、日々の鍛錬が必要であると感じております。今年度のレーン記念賞受賞者として選ばれたことを心の糧にして、更なる努力をしていく所存です。この度は、誠に有難うございました。



授賞式にて(著者:後列左から3人目)

# 

「レーン記念賞」は、戦前から戦後にかけて本学の英語教育にご尽力されたレーン先生の功績を記念して、1965年(昭和40年)に設けられました。この賞は、本学の学部1、2年次に英語の成績が優秀で、レーン夫妻の残した国際親善の精神にふさわしい学生に授与するものです。

当初は「レーン記念奨学金」として発足しましたが、1997年(平成9年)からは現在の「レーン記念賞」 に改めました。現在は、賞状とレーン先生の肖像を刻んだ記念メダル及び図書券を贈呈しています。

(北海道大学ホームページより)

# 海外教育交流支援事業

「国際保健医学の教育・研究コンソーシアム確立のためのワークショップ」を開催して スリランカ・ペラデニヤ大学(2010年3月22-26日)

#### 玉 城 英 彦 国際保健医学分野 教授

2009年3月、北海道大学で開催された「教育研究のⅡための英語による共同プログラムの創成」に関する会議に於いて、「グローバルへルスのための教育・研究コンソーシアム」が参加大学との間で締結された。参加大学は本学の大学間交流協定校であるデリー大学(インド)、デラサル大学(フィリピン)、ペラデニヤ大学(スリランカ)、ジュネーブ大学(スイス)、マヒドン大学(タイ)、ハワイ大学(米国)の6大学およびWHO神戸センターである。

その活動の一環として、第1回目のワークショップが

2010年3月22日から4日間にわたり、ペラデニヤ大学に 於いて開催された。上記大学のほかにオブザーバーとし てテキサス大学(米国)および名桜大学(沖縄)の研究 者も参加した。

初日は、コンソーシアムのミッションを再確認すると ともに、疫学や調査方法に関する大学院共通講義の作成 やコンソーシアム教員の参加などについて議論が活発に 交わされた。

2-3日目は、関連内容の論文執筆への取り組みや、

コンソーシアムの将来の活動計画について論議した。また各国の開発における人口社会学的なインパクトに関する論文をコンソーシアムとして、また国別に執筆することを合意した。

最終日はペラデニヤ大学の関係者との協議の後、首都 コロンボへ移動し、コロンボ大学の関係者と情報交換を 終えた。

ワークショップ参加者は、スリランカの激辛カレーに 舌鼓しつつ、30年におよぶ内戦が終結して平和が戻った 常夏の島の文化・習慣などを満喫し、帰国の途に着いた。

後記:このコンソーシアムの活動の一環として今年、大学院共通講義として、「エイズワクチン研究開発 I (AIDS Vaccine Research and Development I)」(6月7-11日)、「Global Health and Human Ecology I (国際保健医学と人類生態学 I)」(6月14-18日)をすでに実施し、「Epidemiology I (疫学 I)」(8月23-28日)、「Epidemiology II (疫学 I)」(8月30日-9月3日)、「Survey Methods I (研究調査法 I)」(8月30日-9月3日)を実施する予定である。また、「エイズワクチン研究開発 I (AIDS Vaccine Research and Development I)」は、「東アジア諸国におけるエイズワクチン臨床開発のための若手研究者ネットワークの構築(East Asia

Young Researchers Network for Clinical Trial of AIDS Vaccines)」事業と $JICA \cap AIDS$ の予防及び対策 (B)」コースの共通講義として、「疫学II」「疫学II」はグローバル COEプログラム「人獣共通感染症国際共同教育研究拠点の創成」のコア科目としても実施される。

さらに、本年9月下旬に持続可能な社会のための国際 保健教育研究に関するシンポジウムを北大にて開催する ことを決定した。本シンポジウムは、北大サステイナビ リティーウィーク2010の行事の市民向け講座として実 施する予定である。



ワークショップの参加者とペラデニヤ大学にて(左端が著者)

#### 国際交流基金補助事業 Uta Francke 教授講演会を開催して

齋藤 伸治 小児科学分野 講師 有賀 正 小児科学分野 教授



Uta Francke教授

平成22年6月4日(金)午後6時からホテルロイトン 札幌2階リージェントホールにおいて北海道大学大学院 医学研究科・医学部医学科 国際交流基金による援助・ 補助事業の支援を受け、Uta Francke教授の講演会を開催 いたしました。40名ほどに 参加いただき、質の高い討

論を行うことができました。Francke 教授は本年5月20日~22日に福岡で行われた第52回日本小児神経学会に特別講演のために招待され、来日されておりました。この機会を利用して、札幌まで足を延ばしていただきました。Francke 教授は1989年から Stanford University, Department of Pediatrics and Geneticsの教授を務められ、1999年にはアメリカ人類遺伝学会の会長を務められた、人類遺伝学の第一人者です。幅広いご業績のなかから、今回は「Dissecting microdeletions to find genes that cause phenotypes」の演題で、Prader-Willi症候群や

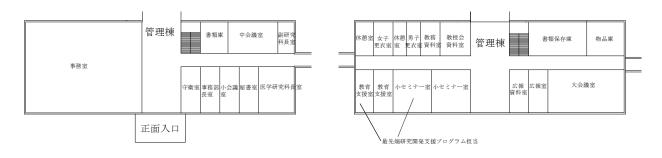
Williams 症候群などの微細欠失症候群から原因遺伝子を同定し、マウスモデルを作成してその機能を解析する一連のご研究についてご講演いただきました。これらの疾患は精神遅滞や認知障害を理解する上で重要なモデルです。患者解析と実験動物での研究を組み合わせることで、より質の高い理解が得られることを学ぶことができました。

Francke 教授には講演会当日と、翌日に北大小児科に来ていただき、臨床と実験に関して、直接ご指導いただき、質の高い意見交換を行うことができました。第一人者の方を大学にお招きでき、直接お話することができることは、教室での研究に大きな刺激になり、特に、若手の大学院生や研究者のモチベーションに素晴らしい影響を与えることを実感いたしました。このような機会が沢山あればと思います。

最後に、今回の講演会は平成24年5月17日に北海道 大学小児科・有賀正教授が札幌にて主催する第54回日 本小児神経学会を記念して企画されました。最先端の研 究に触れることで、2年後の学会に向けて、大きく盛り 上がることができたと考えております。

# ◆ 管理棟の改修工事が終了しました ◆

平成21年12月に着工した管理棟の改修工事が終了し、去る平成22年4月21日 (水)~26日 (月)、移転作業が行われました。改修工事後の各室等配置は、平面図のとおりです。



管理棟 1 階平面図

管理棟2階平面図

# ◆ 平成22年度 財団等の研究助成採択状況 ◆

	財団法人等名	種別	研究者名	交付金
財団法人 喫煙科	学研究財団	研究助成	玉木 長良	2,000,000
財団法人 日本ワ	ックスマン財団	学術研究助成	瀬谷 司	1,000,000
財団法人 工藤学術財団	研究費補助 (A)	畠山 鎮次	100,000	
	研究費補助(A)	大場 雄介	100,000	
	研究費補助(A)	橋本 あり	100,000	
財団法人 杉野目	記念会	講演会開催協力助成	本間 研一	50,000
財団法人 秋山記念生命科学振興財団	研究助成 (一般)	奥村 文彦	1,000,000	
	研究助成(奨励)	押海 裕之	500,000	
		吉田 隆行	500,000	
		加瀬 諭	500,000	
		安東 頼子	500,000	
財団法人 伊藤医薬学術交流財団	学会等助成	大澤 崇宏	200,000	
		荒木 敦子	150,000	
		米代 武司	200,000	
		真鍋 治	200,000	
	招聘助成	西村 正治	200,000	
		本間 研一	100,000	
	海外留学研究交流助成	夏賀 健	300,000	
	(海外留子如九文/加助成	庄野 雄介	300,000	
財団法人 住友生	命社会福祉事業団	海外医学研究助成	柳 輝希	1,500,000
財団法人 武田科	学振興財団	生命科学研究助成	佐邊 壽孝	10,000,000
財団法人 北海道大学クラーク記念財団	博士後期課程在学生研究助成	保科 大地	500,000	
		國松 淳	450,000	
		新熊 悟	500,000	
			真鍋 治	500,000

平成22年6月30日までの採択判明分

# ◆ 平成22年度 科学研究費補助金採択状況

単位:千円

					TE: 111
研究種目	新規申請	継続申請	交付内定 (採択)	平成22年度交付決定	
	件 数	件数	件 数	件 数	交付金額
特別推進研究	0	0	0	0	0
特定領域研究	5	1	3	3	16,600
新学術領域研究 (領域提案型)	11	3	5	5	67,470
新学術領域研究 (課題提案型)		1	1	1	10,010
基盤研究(S)	1	1	1	1	21,190
基盤研究(A)	5	8	9	8	99,190
基盤研究(B)	22	15	20	20	115,440
基盤研究(C)	33	39	54	57	76,570
挑戦的萌芽研究	34	6	14	15	2,510
若手研究(S)		0	0	0	0
若手研究(A)	6	2	2	1	9,230
若手研究(B)	27	12	25	27	49,530
研究活動スタート支援	3	2	2	1	1,248
合 計	147	90	136	139	468,988

# - 広報室便り14 ----

2010年度の「広報室」の刊行予定として、オー プン・ユニバーシティなどに使用される医学部を紹 介した「医学部医学科案内2010」「医学部医学科概 説DVD」を作成しているところです。また、例年 どおり「大学院医学研究科・医学部医学科概要」の 日本語版および英語版を作成予定です。すでに終え た作業として、大学院博士課程の案内に含まれてい た修士過程案内を独立させた「大学院医学研究科修 士課程案内」を刊行しました。現在はこの英語版も 作成中です。今年に引き続いている作業としては 「北大医学部創立90周年記念誌」の作成にあたって おります。引き続き、ご協力の程よろしくお願い致 します。HPに関しては、従来どおり教務関係の公 示・書類手続きの便宜を図ると共に、各種刊行物の 掲載も行っております。また、各分野HPの移設支 援も順調に進んでおり、時限の11月までには終え る予定ですので、皆様のご協力をお願い致します。

野々村克也 (広報室長)

#### --- Home Page のご案内 ---

医学研究科/医学部医学科広報は

http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受付けメールアドレスは、

goiken@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

# 編集後記一

北国にも本格的な夏がやってきた。今回の広報に はその熱気が伝わるような記事が盛り沢山である。 当医学研究科・医学部医学科の教育研究活動領域の 広さと深さが行間からも感じられる。

しかし、今回、「広報」の編集後記を担当することになって、それがお上からの一方的な達しのようなものになっていないか、心配になってきた。広報は、記事の内容と写真などの挿絵やコラムなどの、その両方の上手な組み合わせで構成されるものであるが、さて今回の場合はどうだろうか。もしかした挿絵の写真が多く、かつ大きいのではないかと不安になってきた。

この広報は、本来大学からの通信であると同時に、かつ読者からの便りという双方向の声を交換する場であると思う。大学が地域により開かれたものになるためにも、多くの草の根の、読者の声を吸収することが必要である。これが翻って広報の質の向上につながる。

編集者一同、皆さんのご意見、そして風の便りを お待ちしています。

玉城 英彦

#### 北海道大学大学院医学研究科/医学部医学科

**発** 行 北海道大学大学院医学研究科·医学部医学科 広報編集委員会

060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

連絡先 医学系事務部総務課庶務担当

電 話 011-706-5892

編集委員 田中 伸哉 (委員長)、白土 博樹、

玉城 英彦、佐藤 松治